

体育授業における達成目標の接近回避傾向と 社会的スキル及び適応感の関係

藤 田 勉 *

(2009年10月27日 受理)

Achievement Goals, Social Skills, and Adjustments in Physical Education Classes

FUJITA Tsutomu

要約

本研究の目的は、達成目標理論 (Dweck, 1999; Nicholls, 1989; Elliot & McGregor, 2001) の中から、Atkinson の達成動機づけ (Atkinson & Feather, 1966) の考え方を応用した達成動機づけの階層モデル (Elliot & McGregor, 2001) について、社会的スキルと適応感を組み込んだモデルを体育授業において検討することであった。研究方法は、中学2年生 (男子 756名, 女子 775名) を対象とした質問紙調査であった。調査で得られたデータは、構造方程式モデリングによって分析がなされた。その結果、有能感及び失敗恐怖は達成目標を媒介して社会的スキルへ影響し、社会的スキルから適応感へ影響することが示された。しかしながら、達成目標から社会的スキルへの影響について、熟達接近目標及び成績接近目標という接近的な目標からの影響は示されたが、熟達回避目標及び成績回避目標という回避的な目標からの影響は示されなかった。

キーワード：スポーツ，動機づけ，学習方略，達成動機づけの階層モデル，有能感

* 鹿児島大学教育学部 講師

1. はじめに

他者より優れることを目標とするか、自己の熟達を目標とするかでは行動パターンが異なることを達成目標理論 (Dweck, 1999; Elliot & McGregor, 2001; Nicholls, 1989) では説明してきた。体育・スポーツ心理学における達成目標理論研究では、Nicholls (1989) の2目標視点の考え方がDuda(1989)によって尺度化され、1990年代から多くの実証的研究が展開されてきた。2目標視点では、有能さの定義を中心に概念化された課題志向性と自我志向性という2つの目標志向性について検討がなされてきた。しかしながら、結果の非一貫性が指摘されている (村山, 2003)。

Elliot & McGregor (2001) は、2目標視点で解消できなかった点を克服するべく、2種類の定義と2種類の価値の組み合わせにより4つの達成目標を概念化した。4目標視点では、熟達接近目標 (熟達することを目標とする)、熟達回避目標 (熟達できないことを回避する)、成績接近目標 (他者と比較して優れることを目標とする)、成績回避目標 (他者より劣ることを回避する) という4種類の達成目標について検討がなされている。さらに、これら達成目標の先行要因 (例えば、有能感、失敗恐怖など) と結果要因 (内発的動機づけや学業成績など) を仮定したのが、達成動機づけの階層モデル (Elliot & McGregor, 2001) である。

スポーツにおいては、Conroy et al. (2003) が4目標視点によって概念化された達成目標を尺度化し、体育においても、Wang et al. (2007) が尺度開発を行った。Nien & Duda (2008) はスポーツにおいて、Wang et al. (2009) は体育授業において、達成動機づけの階層モデルを応用し、達成目標から動機づけへの影響を検討した。また、Chen et al. (2009) は、失敗恐怖から熟達回避目標、成績接近目標、成績回避目標を媒介してセルフハンディキャップへ影響するという達成動機づけの階層モデルにおける回避的なメカニズムを実証した。

わが国の体育授業では、4目標視点による達成目標と動機づけの関係について、藤田 (2009) や藤田 (印刷中) によって検討がなされ、熟達接近目標は自律性の程度が高い動機づけ (内発的動機づけ、同一化的調整) へ正の影響を示すこと、成績接近は自律性の程度が低い動機づけ (取り入的調整、外的調整) へ正の影響を示すこと、熟達回避目標及び成績回避目標は外的調整及び非動機づけへ正の影響を示すことがおおそ明らかになった。このように、先行研究では行動の自主性、積極性、持続性等の側面が検討されてきたが、対人行動というクラスメイトとの相互作用的な側面に対して達成目標がどう影響するのかという検討はなされていない。

佐々木 (2004) は、生きる力が重視されている観点から、運動やスポーツを学習内容とする体育授業では、対人的協調や協同が学習内容に包括されていると考えられることを背景として、社会的スキルを概念化している。達成目標の有能さの定義は、他者準拠的であるか自己準拠的であるかに区別される。対人行動を取る中では、他者よりも優れることを目標とする生徒と自己の熟達を目標とする生徒では、社会的スキルへの影響は異なってくると考えられる。そこで本研究では、達成目標と社会的スキルの関係を達成動機づけの階層モデルに組み込んで検討することを目的とする。また、佐々木 (2004) は、社会的スキルと適応感の関連があることも明らかにしてい

ることから、本研究では、体育授業に対する適応感を規定する社会的スキルに影響する達成目標のメカニズムという観点から、「有能感・失敗恐怖→達成目標→社会的スキル→適応感」という因果モデルの検討を行うことを目的とする。

2. 方法

調査対象と調査方法

中学2年生（男子756名，女子775名）を対象とした質問紙調査を行った。調査方法は、質問項目を記載した調査票を調査対象校へ郵送し、体育担当教員あるいは担任から生徒へ調査票を配布するよう依頼するというものであった。回答終了後、調査票は速やかに郵送にて返送された。

質問項目

有能感・失敗恐怖

藤田（2009）の尺度を使用した。この尺度は、有能感4問，失敗恐怖4問で構成されている。

達成目標

藤田（2009）の尺度を使用した。この尺度は、熟達接近目標3問，熟達回避目標3問，成績接近目標3問，成績回避目標3問の計12問で構成されている。

社会的スキル及び適応感

佐々木（2004）の社会的スキル尺度及び佐々木（2003）の適応感尺度を使用した。社会的スキル尺度は、規範維持スキル尺度，積極的主張・行動スキル尺度，共感的行動スキル尺度，分与申請スキルの4つの尺度で構成されている。本研究では、分与申請スキル尺度を除き、各尺度を6問で構成した尺度を使用した。適応感尺度は、連帯志向尺度と体育適応尺度の2つの尺度で構成されている。本研究では、連帯志向尺度から4項目，体育適応尺度から4項目を使用した。連帯志向尺度については、反転項目が含まれていたが、本研究では肯定的な表現にして使用した。

統計解析

質問項目の分析について、検証的因子分析により各尺度の妥当性を検討し、内的整合性（ α 係数）の算出により信頼性の検討をした。その後、「有能感・失敗への危惧→達成目標→社会的スキル→適応感」という因果モデルの検討を行うために構造方程式モデリングを行った。各尺度の基本統計量，尺度間の相関行列， α 係数の算出には，SPSS12.0を使用し，検証的因子分析及び構造方程式モデリングには，AMOS5.0を使用した。なお，検証的因子分析及び構造方程式モデリングにおける統計的有意水準を5%とし，モデル適合度指標には，GFI, CFI, RMSEAを使用した。

3. 結果

質問項目の分析

検証的因子分析により、各尺度の妥当性を検討したところ、有能感・失敗恐怖 (GFI=.977, CFI=.970, RMSEA=.065), 達成目標 (GFI=.972, CFI=.953, RMSEA=.053), 社会的スキル (GFI=.947, CFI=.910, RMSEA=.056), 適応感 (GFI=.985, CFI=.961, RMSEA=.051) のいずれも良好な適合度が示された。次に、各尺度の信頼性の検討として、内的整合性 (α 係数) を算出したところ、有能感 ($\alpha = .86$), 熟達接近目標 ($\alpha = .78$), 成績回避目標 ($\alpha = .80$), 規範維持スキル ($\alpha = .79$), 積極的主張・行動スキル ($\alpha = .74$), 共感的行動スキル ($\alpha = .76$) 連帯志向 ($\alpha = .72$) については満足する水準が得られたものの、失敗恐怖 ($\alpha = .67$), 熟達回避目標 ($\alpha = .56$), 成績接近目標 ($\alpha = .67$), 体育適応 ($\alpha = .64$) については十分な信頼性が得られなかった。今後の課題である。各尺度の基本統計量, 各尺度間の相関行列は, 表1に示した通りである。

表1. 基本統計量と相関行列

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1 有能感	-										
2 失敗恐怖	-0.201	-									
3 熟達接近目標	0.359	0.099	-								
4 熟達回避目標	-0.092	0.608	0.184	-							
5 成績接近目標	0.412	0.039	0.318	0.165	-						
6 成績回避目標	-0.015	0.473	0.069	0.408	0.232	-					
7 規範維持 スキル	0.062	0.147	0.307	0.121	0.005	0.001	-				
8 積極的主張・ 行動スキル	0.449	-0.099	0.351	-0.052	0.256	0.004	0.192	-			
9 共感的行動 スキル	0.228	0.163	0.442	0.179	0.143	0.018	0.470	0.468	-		
10 連帯志向	0.394	0.042	0.461	0.070	0.290	0.025	0.232	0.402	0.494	-	
11 体育適応	0.503	-0.031	0.580	0.052	0.310	0.036	0.353	0.380	0.410	0.486	-
平均	2.981	3.344	4.067	3.367	3.265	3.095	3.894	3.007	3.759	3.997	3.626
標準偏差	0.978	0.786	0.784	0.781	0.801	0.916	0.706	0.718	0.638	0.732	0.730

構造方程式モデリング

「有能感・失敗恐怖→達成目標→社会的スキル→適応感」という因果モデルを構築して、構造方程式モデリングを行った。構築されたモデルの全体的な評価として、モデル適合度指標は、GFI=.910, CFI=.893, RMSEA=.074 であり、ほぼ満足する水準であった。次に、潜在変数間の有意なパスを中心に解釈し、モデルの部分的な評価を行っていく。

第1に、有能感及び失敗恐怖から達成目標への影響について結果を示す。有能感からは、熟達接近目標及び成績接近目標へ有意な正のパスが示された。失敗恐怖からは、成績接近目標、熟達回避目標、成績回避目標へ有意な正のパスが示された。これらのことは、主に、有能感は接近的な目標へ影響し、失敗恐怖は回避的な目標へ影響することを示している。しかしながら、失敗恐怖からは、弱いながらも成績接近目標へ有意な正のパスが示されており、有能感と失敗恐怖の相関は低い値となっている。これらのことは、有能感と失敗恐怖は2項対立の関係ではなく、両方とも高いあるいは低いということもあり得るということであり、さらには、どちらか一方だけが高いときよりも両方とも高い方が成績接近目標を高めることを示唆している。

第2に、達成目標から社会的スキルへの影響について結果を示す。熟達接近目標からは、積極的主張・行動スキル、規範維持スキル、共感的行動スキルへ有意な正のパスが示された。成績接近目標からは、積極的主張・行動スキルへ有意な正のパスが示された。これらのことは、社会的スキルへの影響には、特に熟達接近目標の影響が大きいことを示している。また、熟達回避目標及び成績回避目標からは有意なパスは示されなかった。これらのことは、社会的スキルに対して、接近的な目標は影響するが、回避的な目標は影響しないことを示している。

第3に、社会的スキルから適応感への影響について結果を示す。積極的主張・行動スキル、規範維持スキル、共感的行動スキルは、体育適応へ有意な正のパスが示された。また、規範維持スキル及び共感的行動スキルについては、連帯志向へも有意な正のパスが示された。これらのこと

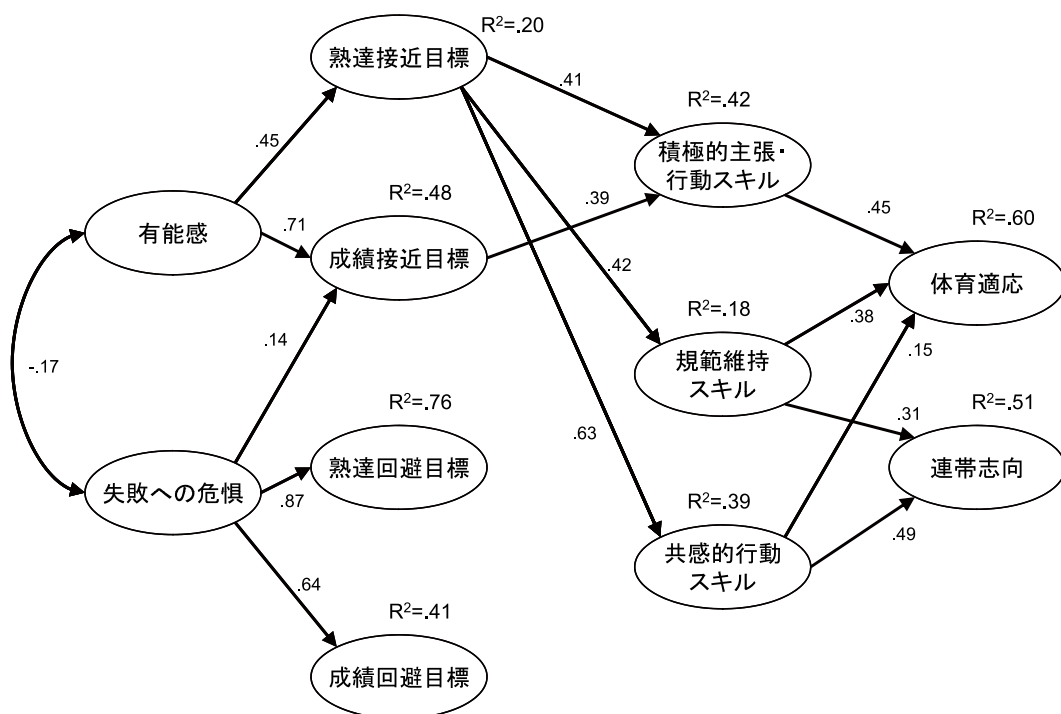


図1. 構造方程式モデリングの結果

は、全ての社会的スキルの下位尺度が体育適応へ影響するが、連帯志向へは規範維持スキル及び共感的行動スキルが影響することを示している。

4. 考察

本研究では、体育授業における達成目標と社会的スキル及び適応感の関係を明らかにするために、「有能感・失敗恐怖→達成目標→社会的スキル→適応感」という因果モデルの検討を行った。有能感及び失敗恐怖からは各達成目標への影響が示されたが、それら達成目標の中で社会的スキルへの影響を示したのは、接近的な目標（熟達接近目標及び成績接近目標）のみであった。また、特に熟達接近目標から各社会的スキルへの影響が強かった。そして、社会的スキルそれぞれは、適応感のうちの体育適応あるいは連帯志向の両方あるいはどちらか一方に影響を示した。すなわち、本研究では、有能感及び失敗回避から接近的な目標を介して社会的スキルへ影響し、その社会的スキルが適応感へ影響するというモデルが示された。

有能感と失敗恐怖の相関が低い値であること、また、それら両者から成績接近目標へ正の影響が示されたことは、両者が対立的な関係ではないことを意味している。そのため、失敗恐怖からも成績接近目標への正の影響が示されたと考えられる。これは、Nien & Duda (2009) や藤田 (2009) においても示されたことであった。すなわち、成績接近目標を高めるには、有能感と失敗への危惧の両方を高めることが有効であると考えられる。しかしながら、失敗への危惧を高めることは、回避的な目標（熟達回避目標及び成績回避目標）も高めることになる。本研究の結果からは、回避的な目標の高まりによって社会的スキルへの影響は示されていないが、藤田 (2009) は、回避的な目標から外的調整や非動機づけという自律性の程度が低いあるいは不適応的な動機づけへ正の影響があることを示した。したがって、有能感と失敗への危惧の両方ではなく、有能感のみを高める指導を考えることが、熟達接近目標及び成績接近目標の高まりを通して積極的主張・行動スキルを高めていくのに望ましいのではないかと考えられる。

積極的主張・行動スキルに対しては、熟達接近目標及び成績接近目標の両方からの影響が示されたが、規範維持スキル及び共感的行動スキルに対しては、熟達接近目標のみからの影響が示された。成績接近目標が高ければ、他者より優れることが重視される。そうなれば、自己の能力を誇示するために、自分の考えをはっきり言うというような積極的主張・行動スキルが高められることが推察される。しかしながら、規範維持スキルや共感的行動スキルは、対人関係を重視するスキルであることから、これらのスキルを高めるために他者より優れるという成績接近目標は影響しないのではないかとと思われる。一方、熟達接近目標は運動を上達させるために全力を尽くそうとするが、その過程においては、他者との協同があり、自分の考えを主張するのみならず、共に関わり考え合うといった行動が取られているのではないかとと思われる。

回避的な目標の両者からは社会的スキルへの影響が示されなかった。体育授業の中で運動をするということは、クラスメイトと相互作用を取るようになるが、運動をすることから回避しよう

とする傾向が強ければ、対人的な行動が上手く取れるかどうかということより、関わり自体を避けているのではないかと思われる。

本研究では、達成目標と社会的スキルの関係を検討したが、回避的な目標については十分な知見が得られなかった。これは、本研究で使用した社会的スキルが接近的な側面を概念化したものであったためと思われる。尺度間の相関関係より、接近的な目標と回避的な目標は対立関係ではないことが示されているように、社会的スキルに対して、接近的な目標から正の影響が示されたとしても、回避的な目標からの負の影響が示されるわけではないと考えられる。今後は、回避的な目標と回避的な側面を概念化した認知的・感情的・行動的側面の関係を検討していくことにより、達成動機づけの階層モデルによって解明される知見も増えてくると考える。

付記

本研究の趣旨にご賛同し、ご協力下さいました生徒の皆様、各中学校の先生方に深く感謝申し上げます。

文献

- Atkinson, J.W. & Feather, N.T. (1966). *A theory of achievement motivation*. New York: Wiley.
- Chen, L.H., Wu, C.H., Kee, Y.H., Lin, M.S., Shui, S.H. (2009). Fear of failure, 2 × 2 achievement goal and self-handicapping: an examination of the hierarchical model of achievement motivation in physical education. *Contemporary Educational Psychology*, 34, 298-305.
- Conroy, D. E., Elliot, A. J., & Hofer, S. M. (2003). A 2 × 2 achievement goals questionnaire for sport. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 25, 456-476.
- Duda, J.L. (1989). Relationship between task and ego orientation and the perceived purpose of sport among high school athletes. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 11, 3, 318-335.
- Dweck, C. S. (1999). *Self-theories: Their role in motivation, personality, and development*. Philadelphia: Psychology Press.
- Elliot, A.J., & McGregor, H. (2001). A 2 × 2 achievement goal framework. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 501-519.
- 藤田勉 (2009). 体育授業における達成目標の接近回避傾向と動機づけの関係. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 19, 61-70.
- 藤田勉 (印刷中). 体育授業における達成目標概念の比較検討. 鹿児島大学教育学部紀要教育科学編, 61.
- 村山航 (2003). 達成目標理論の変遷と展望—「緩い統合」という視座からのアプローチ—. *心理学評論*, 46, 564-583.
- Nicholls, J. G. (1989). *The competitive ethos and democratic education*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Nien, C. L., & Duda, J. L. (2008). Antecedents and consequences of approach and avoidance achievement goals: a test of gender invariance. *Psychology of Sport and Exercise*, 9, 352-372.
- 佐々木万丈 (2003). 体育授業に対する適応：中学生の場合. *体育学研究*, 48, 153-167.
- 佐々木万丈 (2004). 中学生の体育授業における社会的スキルの分析：性、学年、体育授業への適応感に着目して. *体育学研究*, 49, 424-434.
- Wang, C.K.J., Biddle, S.J.H., & Elliot, A.J. (2007). The 2 × 2 achievement goal framework in a physical education context. *Psychology of Sport and Exercise*, 8, 147-168.
- Wang, C.K.J., Liu, W.C., Lochbaum, M.R.L., & Stevenson, S.J. (2009). Sport ability beliefs, 2 × 2 achievement goals, and intrinsic motivation: the moderating role of perceived competence. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 80, 303-312.

